
とんでもないものを占ってしまった・・・・・・わ

jge

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とんでもないものを占ってしまった……わ

【Nコード】

N5133BA

【作者名】

jgge

【あらすじ】

落ちこぼれ占い師の少女が黒猫の運勢を占います。すると、その猫の結婚相手は自分でした。その猫は人間が姿を変えたもの。猫は人間に戻り、ハッピーエンドを迎えます。

まだ書き始めですが、そんな物語にしていきたいです。

1 落ちこぼれ占い師

「あゝあ、今日もお客さんなしか」

ため息をつきながら少女は言った。黒いマントに黒いフード。目の前の小さい卓では、ロウソクの火がちろちろ燃えている。

「今日はこれで何本目かな。とほほ。」

大通りにでも出れば、何かの拍子でお客さんもつかまるんだろうけど……

でもこの少女には、とてもそんなことをする勇氣はなかった。そこは一流の占い師たちの場所だ。そんなところにわたしなんかが店を出したら、どんな目で見られるか……。

2

占い師のランクは胸に着けたバッジでいやでも分かる。客はそれを見ながら、悩みにふさわしい占い師を探す。

難しい悩みには高いお金を払ってランクの高い占い師を。深刻じゃない悩みは低いランクでも大丈夫。

少女がこれまでに受けた依頼は、せいぜい「なくした手袋はどこにあるか」というくらいのもの。それも、まあ出てこなくてもいいけどね、という感じのお客。

占いの結果を伝えた時の、客の呆れた顔が今でも忘れられない。

お客「たぶん家にあると思うんだけど」

少女「見えてきました、見えてきましたよ!……家ですね。家のどこかです」

お客「……それで、家のどこなのかな」

少女「そこまでは、ちょっと……」

大通りでは、高位のバッジを誇らしげに着けた占い師たちが、人生に深く関わる悩みを占っている。

結婚のこと、病気のこと、家の建築のこと、寿命のこと、行方の分からない知り合いのこと……

少女のところには、そんな悩みはぜんぜんこない。くるはずもない。少女は占い師としては最低ランク。何のバッジもなく、ただ黒い服を着ることを許されているだけ。

優秀なら10歳で占い師の学校を卒業できる。普通は15歳。けれど、少女は留年に留年を繰り返して、18歳になってやっと、ほとんどお情けで卒業させてもらえたのだった。

それでも卒業したての頃はうきうきして客を待っていたものだ。しかし、自分の前を素通りし、近くにいたる占い師に相談する客を一人、また一人と数えるごとに、少女の心は沈んでいった。

周りの占い師たちがみな客の相談にのる中、自分だけ客もなく黙って座っているのはつらいものだ。

・この占い師はバッジがありません。だから、皆さん気をつけて下さい。

バッジのない黒い服に、なんだかそう宣伝されてる気がした。

同級生はみんなキャリアを積んで、いい占いをしてる。後輩だった子たちもわたしよりずっと早く卒業して、もうあの大通りで占ってる子もいる。

・そんな中に行くなんて、ね

少女は、その恥ずかしさに耐えるだけの気力を、とても持てなかった。

* * *

この国では占いがさかんで、夜になると、街のあちこちに占い師のローソクが灯る。

少女はだんだん占い師の少ない通りを探すようになった。場末の酒場あたりなら、酔った客でも来るかもしれない。

でもそんなところに少女が一人でいたら、何をされるか分かったもんじゃない。

人通りがあつて、でもみんな急いでなくて、しかも占い師がいない場所。

少女はいつもそうやって街のあちこちを転々としていた。

* * *

2 黒猫

少女は、いつの間にか頬杖をついて、目の前のローソクの火をぼーっと見ていた。

あと5ミリほど目が上下に大きかったら、美少女に手が届く、かもしれない。

少女は鏡を前にした時、いつも目をこすっては二重にし、目を大きくしていた。けれど、三秒ほどするともとの一重まぶたに。

- たった5ミリなんだけどなー。5ミリの差って大きい

「ああ、だめ、だめ。しんみりしちゃう」

少女はそう言ってローソクから目を上げた。

すると、

少女の目の前に猫がいた。黒猫。机に行儀よく座っている。

夜の闇と同じ黒色だったから、ぼーっとローソクを見ていた少女の目には入らなかったのだ。

- なんで猫が……

「鈴は……、着いてないね。お腹すいたの？」

返事はなかった。

少女が机に目を移すと、そこに一枚の銅貨があった。

・あれえ、今日はお客さんゼロだったのに

よく見るとその銅貨、きずだらけで青いさびが浮いている。ふつう、これほど痛んだ硬貨は回収されるから、長い間どこかに落ちていたものなのだろう。

「猫ちゃん、君が持ってきたの？」

返事はなかった。

・この身をあわれとおぼしめした神様のお使いだろうか

少女はそんな風にも思った。占いだけではとても食べていけず、バイトにバイトを掛け持ちして暮らしている。銅貨一枚ではあったが、少女にはありがたいお金であった。

「でも、ただでもらうんじゃ気が引けるから、占ってあげるね」

・猫の運勢を占うなんて聞いたことないけど、まあいいや

少女はそう思いながら、水晶玉に目を凝らした。相手が猫だから、何を占って欲しいか聞いても無駄だろうな。少女はそう思い、特に中身を決めず、ランダムに占い始めた。

しばらくして、水晶玉が薄いピンクに染まり始めた。中に何やらもやもやとした像ができて始めた。

「ふむふむ、これは結婚運だね。君のお相手は……」

少女はぎょっとした。

「これ、猫？じゃないよね

少女が水晶玉の中に見たのは、人間の女の子。それも、鏡に向かってまぶたをこすっている女の子。つまり、少女自身だった。

少女は目をこすった。もちろん、大きくするためではない。

何度もこすって見てみたが、でもやっぱりそれは自分だった。

少女はしばし呆然と水晶玉を見た後、猫に目を移した。

猫も驚いたのだろうか、まんまるに見開いた目で水晶玉を見ていた。そのまま少女の方に顔を上げる。

しばし呆然と見詰め合う少女と猫。

ややあって、少女ががっくりと肩を落とした。

「占い師として成功できないどころか、結婚相手が猫だなんて……」

O r z

救いは、自分が落ちこぼれの占い師ってことだ。落し物の占いで

も当たる確率が低いくらいだ。まして結婚占いなんて高度な占いとなれば……

少女は何を思ったか、突然、猫の両手をつかんでひょいっと上に持ち上げた。

猫はびろーんと伸び、お腹のにくが下に集まって、なんだかかとおくりみたいな格好になった。

猫の後ろ足の間、つまり猫の股間を少女は凝視した。メス猫だったら、この時点で占いは外れた。

でも、それはあった。

一応オスみたいね。……って何やってんだろ、わたし

少女のしているものに気づいたのか、猫はニャニャッと鳴いて足をバタバタさせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5133ba/>

とんでもないものを占ってしまった・・・・・・・・わ

2012年1月14日06時50分発行